

蟹に化した人間たち(2)： 平家蟹の記録を中心に

蛸 島 直

前稿の訂正

p.191の「表1」の1の辞典名「漢英対象いろは辞典」は「漢英対照いろは辞典」の誤りであった。

p. 201の23行目「平家蟹・長田蟹と名付く」は「平家蟹と名付く」の誤りであった。

はじめに

前稿「蟹に化した人間たち(1)」[蛸島 2012]では、平家蟹をはじめ、人間が蟹に再生・化生したとされる「へいけがに」「おさだがに」「おにがに」「きめんがに」「きよつねがに」「しまむらがに」「たけぶんがに」等の伝承について、20点の国語辞典の記載、その他、おおむね19世紀までの文献における記載の仕方を概観してきた。そこには、同物異名(synonym)、同名異物(homonym)が混在しながらも、それらの正体を「平家蟹」に一元化しようという傾向が認められた。しかしながら、上記の蟹を安易に等号で結ぶべきではないというのが筆者の姿勢であった。

前稿の「はじめに」において、蟹に限らず、人間が死後、他の動植物に姿を変えたという伝承群の研究に際して、筆者は、少なくとも3つの課題を設定した。その第一が、これらの伝承上の生物を生物学上のいずれの種(単数とは限らない)に同定あるいは比定できるか、またはできないかという課題である。前稿では、その第一の課題の途上で紙幅および時間切れとなった。上記の蟹たちに関する記録は相当な量に及び、本稿では「平家蟹」にほぼ限定しながら、19世紀初頭までの記録を追加し、考察を加えていきたい。その作業は次稿あるいは次々稿に続くが、後に資料の表化の作業も行い、図版等の提示も一括して行う予定である。

なお、前稿脱稿後、日本中世文学の鈴木彰氏による2論文：「平家蟹と壇ノ浦 一旅人たちの見聞をめぐる一」[鈴木 2008]と「〈日本〉を背負った平家蟹 ーラフカディオ・ハーンの「平家蟹」をめぐる小考」[鈴木 2009]の存在を知った。ともに、平家

蟹を対象とし多数の文献資料に基づく緻密な研究で、筆者が前稿執筆時に参照できなかったのは誠に迂闊だった。前者は、「とくに壇ノ浦という地域に焦点を合わせて、現地を訪れた旅人たちの見聞が平家蟹に関わる言説・説話や平家蟹理解を伝播させていく様相を、個々の事例に則して具体的に把握しようとする」論文である〔鈴木 2008：468〕。後者は、ラフカディオ・ハーンの記述に焦点を当て、ハーンが「暗示的に日清・日露戦争期の日本の姿を表現をしている」ことを指摘している〔鈴木 2009：42〕。両論文は多数の文献資料を引用・紹介している。

さらに、鈴木論文から梶原正昭氏の『平家残照』（1998）の存在を知った。それは、鈴木氏自身が「構想するにあたり多くの示唆を得た」という〔鈴木 2008：502〕内容であるが、赤間関や阿弥陀寺を訪れた人々の記録を、朝鮮通信使やオランダ商館の使節たちのそれを含め丹念に紹介している。『平家残照』の対象は、『道ゆきぶり』における応安4年（1371）の記録に始まり、『豊後往来紀行』（1623年の記録：以下『西征詩』まで記録の年を表記）までの中世の記録18件、姜弘重の『東槎録』（1624）から桃節山の『西遊日記』（1865）に至る近世の記録82件、都合101件である。その中で梶原氏は『画典通考』（1727）、『花がたみ』（1751）、『長崎行役日記』（1767）、『江漢西遊日記』（1789）、『西国紀行』（1792）、『続未曾有記』（1804）、『西遊稿』（1818）、『西征詩』（1824）等における平家蟹の記載を紹介している。

筆者は前稿では、『廣文庫』（1916～1918）等に導かれながら、文献を引用してきたが、梶原・鈴木両氏により「平家蟹」の記載の存在を初めて知った資料は数多い。本稿、そして次稿では、新たな二人の水先人の導きを得ながら、より幅広い文献に目を向けていきたい。

2 古文獻の記載（承前）

「へいけがに」「しまむらがに」「たけぶんがに」の初見？

前稿脱稿のほぼ同時期、2012年4月、磯野直秀氏の原著『日本博物誌総合年表』が刊行された。数多の博物誌資料の渉猟に基づく労作である。その前身である『日本博物誌年表』（2002）は迂闊ながらも見落としていたが、『日本博物誌総合年表〔索引・資料編〕』には「著者が調べた限りで初見と思われる品目」を一覧できる「資料別・動植物名初見リスト」が索引付きで収められている。そこには、前稿で対象とした7名称のうち、「へいけがに」「しまむらがに」「たけぶんがに」が初見される資料名が示されている。それによれば、「へいけがに」については『毛吹草』（1645）が、「しまむらがに」と「たけぶんがに」についてはともに『本草名物附録』（1672?）^{注1）}における「へいけがに異名」としての記載が初見だという〔同：300〕。『本草綱目品目』の附録が『本草名物附録』であるが、両書を掲載する『益軒全集』巻之六の「凡例」によれば、『本草綱目品目』は「李時珍の本草綱目に載せたる品物の目録を挙げて、各旁訓を施し、本草研

究者の便益を謀りたるもの」であり、『本草名物附録』は「本草綱目品目の附録にして、本草綱目の遺漏を補ひて、その品目を挙げ、各旁訓を施し、また本草綱目に載する所のものにつきて、特に先生自らの見解を加へたるものもあり」という内容である[益軒会 1973：2]。

筆者が『本草名物附録』を確認するに、同書「介」の項目に、「鬼蟹」の項目があり、「しまむらがに」「きよつねがに」「たけぶんがに」と旁訓が施される[貝原 1973：841]。磯野氏は「ヘイケガニ異名」と記しているが、少なくとも『益軒全集』所収の記載は「鬼蟹」であり、「へいけがに」とは記されていないことに注意しておきたい。ちなみに益軒の日本地誌『扶桑記勝』(1677年刊)には「日本土産」の条があり、国ごとの「土産名物」を挙げているが、長門にも讃岐にも平家蟹の記載はない[貝原 1973：326]。ただし、摂津の名物21点を挙げるなかに「島村蟹」の記載があること、しかも、これが全国の名物のなかで「蟹」と名の付く唯一の品目であることに注目しておこう[同：323-327]。また、長門の「平家蟹」を「赤間硯」とともに赤間関の二大名物とするかのような表現が後の多くの紀行文に繰り返されるが、『扶桑記勝』は長門の名物7点に「赤間関紫硯」を挙げながら平家蟹は挙げていないこと[同：326]を確認しておきたい。

筆者前稿では、『毛吹草』に先立ち、天文21年(1552)年成立(『国書総目録』)とされる『塵塚物語』における「平家かに」の記載を初見としたが、同書は博物誌資料とは呼びがたいのは当然のことである。多田一臣氏も、平家蟹の伝説は「『塵塚物語』に記された例がもっとも古い」と記している[多田 1995(1994)：169]。このことは鈴木論文により知るところとなったが[鈴木 2008：503]、『塵塚物語』の刊行年については疑問視もされ、鈴木氏は、今井正之助氏の研究を紹介するとともに、自身の見解を示している。これについては後に触れることにしたい。

『後太平記』

『後太平記』は『国書総目録』によれば多々良一竜(南宗庵)の著作で延宝5年(1677)に刊行されている。同書には、足利義満(1358-1408)が長門阿弥陀寺を訪問し、「平家かに」の献上を受けたことが記されていたが、ほぼ同様な記述を『後太平記』に認めることができる。『後太平記上』天部巻第六の「長門國阿彌陀寺御参詣竝御追善之事」である。將軍(義満)が阿弥陀の院主に「凡そ古戦場の地には亡卒の靈魂留つて、奇特妖祥を顕すと云へり、此處には何事かある」と尋ねたのに対し、院主は「源平両家、元暦の妄執は未だ盡きず候哉、夜々鯢波起り、甲冑の武士海の面に馬を飛ばしめ、或時は赤白の幡を翻し、或時は姓名を名乗つて、矢叫の音タシカに聞え候」と実戦さながらの壮烈な様を語っている。院主は「亦是に蟹の候、昔平氏の怨靈蟹フリキウガニと名付け候、御高覧候へ、武者の面目形粧新に、勇々敷見えて、両つの鋏を二刀に構へて、源姓の人をばはさみ、平氏をば味方とや思ひ候ひけん、怒る事なし」と語って、その蟹を將軍の前に放ったのである[早稲田大学出版部編 1928：73]。興味深いのはその後の様子である。

御前に放ちければ、不思議や、一座に列し給ふ人々、將軍を始め奉り、其外細川、畠中、山名、武田、今川、土岐、佐々木、皆源姓なれば、座中に走つて怒をなせば、流石に猛き武將も、今は名詮自性の理、忌々敷思召し、汝迷ひの海に入り、煩惱の波瀾に沈んで、斯る化生と成りぬとて、硯を寄せ、筆を染め給ふ、御追善に曰く、嗚呼悲しき哉、三界流轉の修羅の業は、跋提河の流に落されて苦海の浪に沈み、斯る蟹の姿と化生せし者乎、憐むべし憐むべし [同上]

上記引用の後半以降は『塵塚物語』と同文であり、一方から他方への転写があったとしか考えられない。しかし、蟹に関しては『後太平記』の記述がより詳細かつ魅力的である。

『塵塚物語』では「御上覧に入奉らんとて、かの平家かにを一ツ進上しけれハ」とある。その蟹の生死は不詳であり、筆者などは、下関の土産として有名な乾燥標本だとばかり思い込んでいた。しかし、『後太平記』では、生体が放たれた様を描いているのである。記述はもちろん文学的でもあるが、源姓の者を挟み、平氏を味方と思って怒らないという部分は「平氏の怨^{フシリヤウガニ}靈蟹」の面目躍如といったところであろう。「鉞を二刀に構へて」「座中に走つて怒をなす」という動作の記載も興味深い、海中に棲むヘイケガニは地上あるいは畳の上でどのように行動するのだろうか。

香川県高松市出身の民俗学者、宮武省三は、「平家蟹余譚」（1952）において、上記『後太平記』の引用に続き、自身の記憶を次のように記している。

自分などは幼時知合いの者から送って来た平家蟹数疋を畳の上で放って見てその走り方の素早さに面食った事を今なお記憶しているので、義満を始め諸將の居並ぶ座中で平家蟹が鉞二刀を構えて走り廻ったという場面は目前に見るような心地してこの所面白く読まれるのである。
[宮武 1952：160]

宮武報告には、明らかにヘイケガニと考えられる挿絵が添えられているので、ここでいう「平家蟹」はヘイケガニ、少なくともヘイケガニ科のカニに違いない。そして宮武をして幼時の記憶を目前に浮かばせたような『後太平記』の記述は、ヘイケガニを実際に畳あるいは板床の上に放つての観察経験に基づくものとも考えられる。

ところで、『塵塚物語』における「平家かに」と同様、『後太平記』の「平氏の怨靈蟹」なる呼称も気になることである。両文献の間には転記・転写があったと確信してよいと思われるが、この蟹の名称については転記・転写がなされなかったということになる。さらにどちらの文献も、書写が繰り返されてきたことであろうから、蟹の名称が後年に追加されたという可能性もないとはいえないだろう。ここで、『塵塚物語』と『後太平記』の先後関係について考えてみよう。『国書総目録』によれば、前者が天文21年（1552）、後者は延宝5年（1677）成立であり、『塵塚物語』が120年も先行するということになる。しかしながら、鈴木彰氏は、『塵塚物語』成立の下限は貞享元年（1684）であるという今井正之助氏の研究を紹介している [鈴木 2008：490]。すなわち『後太平記』が先行するということになる。そして、鈴木氏自身は以下のように推測している。義満の

九州下向や阿弥陀寺訪問は史上に確認できない仮構のものであり [同:494]、『後太平記』では義満の下向を元暦の源範頼による平家追討と類比しており、平家蟹の話は「本話が単なる挿話(傍系説話)としてではなく、この九州出陣をどう描くかという構想に根ざした文脈に深く組み込まれている」。さらに、「平家蟹に接した人々の言動を語る地の文と追悼文との表現が密に対応していたこと」などを勘案した結果、『後太平記』所収話から『塵塚物語』所収話へという依拠関係の可能性がより高いと想定している。そして「この推定が正しければ、『塵塚物語』成立の上限として『後太平記』刊行の延宝5年(1677)が一つの指標として浮かび上がってくる」と述べている [同:496]。

そうなれば、「平家蟹」の記載は『毛吹草』(1645)における讃岐八島の名物としてのそれが最初となり、『後太平記』(1677)における赤間関の「平氏の怨霊蟹」、『塵塚物語』における赤間関の「平家かに」の順ということになる。

筆者は文学にはまったくの素人だが、鈴木氏が示すのと同じ根拠の故、正反対の依拠関係も指摘しうるのではないかと考える。すなわち、「かの平家かにを一ツ進上しけれハ」という『塵塚物語』の単純な記述が先で、『後太平記』では「どう描くかという構想に根ざした文脈に深く組み込」むために、より臨場感のある蟹の動きが加筆され、「地の文と追悼文との表現」もより密に対応させられたという流れもまた想定しうるのではないだろうか。

なお、鈴木氏は、先の推定が正しければ、『塵塚物語』成立の上限は延宝5年(1677)となり、つまり「近世初期の段階では、讃岐の平家蟹(『毛吹草』に所載)に比して、壇ノ浦の平家蟹は認知されていたかさえ分からないのが実情なのである」と指摘している [鈴木 2008:496]。

赤間関の平家蟹は後の多数の紀行文に登場する。ここで、『塵塚物語』が成立した可能性の残る16世紀の紀行文に注意してみよう。題名が近似する『九州道の記』(1587)と『九州の道の記』(1592)はともに赤間関及び阿弥陀寺について記載している。

『九州道の記』(1587年の記録)

『九州道の記』は安土桃山時代の武将・文人であった細川幽斎による天正15年(文禄元年:1587)の九州従軍の紀行文である。丹後の田辺を4月21日に出発し、往路は日本海沿いに、帰路は瀬戸内海沿いの難波への三か月に及ぶ記録である。5月10日瀬戸崎(長門市仙崎湾内の港)を出船するが波風がひどく引き返す。海路を諦め、馬などを借り集め、翌日、陸路で関の渡に向かう。伊藤敬氏の注によれば、「関」は赤間関の略称で、「渡」は早鞆の瀬戸(下関市壇ノ浦)と北九州市門司半島との間の水路のことというが [細川1994:552]、文脈から「関の渡」は陸上の地名「赤間関」を意味すると理解すべきであろう。瀬戸崎を出て何日後かは判然としませんが、「関の渡」に着きて、阿弥陀寺に参り侍るに、その傍らに寺あり。所の人は内裏となん言ひ伝へ侍る。寺僧に案内して、安徳天皇御影、その外平家一門の像どもを見侍りける後、かの僧、昔今の短冊

など見せられしに」とある。阿弥陀寺に、壇ノ浦の合戦を追憶する諸装置がすでに用意されていたことを確認することができるが、『塵塚物語』や『後太平記』とは異なり、蟹についての記載はない[同:553-554]。幽齋はその後、対岸の「豊前国門司の関」に渡って、歌を詠んでいる。その後の5月23日、「赤間関を出でて行きけるに、雨の名残にや、浪風の荒きゆゑ小倉に泊りて」とある[同:554]。

幽齋は、赤間関→門司の関→赤間関→小倉と、短期間に関門海峡を一往復半しており、最後の赤間関→小倉は、同日の避難港として小倉を選んだものであった。なお、幽齋は、九州からの帰路、7月4日に再び関の渡（赤間関）に戻り、天候のため6日まで逗留するが、ここでも平家蟹の記載はない[同:562]。

『九州の道の記』（1592年の記録）

秀吉に仕えた文人、木下勝俊は天正20年（文禄元年：1592）の文禄の役に際し、京都から肥前名護屋まで従軍している。『九州の道の記』（同年成立）はその紀行文である。天正20年2月下旬か、門司の関に到着後のことである。「さのみ舟のうち、波の上も堪へがたくて、赤間が関に上がりけり」。門司には上陸せずに、赤間関に上陸し、「ある寺に、先帝の御形並びに一門の公卿、殿上人、局、内侍以下まで、はかなき筆の跡にのみ写し置きたり」とある。阿弥陀寺のことであろう。古を思い、「所せく袖ぞ濡れけるこの海の昔をかけし波の名残に」と歌を残すが、ここでも平家蟹についての記載はない[木下 1994: 581-582]。

16世紀に赤間関および阿弥陀寺を訪ねた二人の文人による紀行文に、蟹に関する記載がないということは、『塵塚物語』の成立を、その後のことと見る一つの指標となるかも知れない。と同時に、「平家蟹」という名称の成立やこの蟹をもって平家の故事を語ることの成立も17世紀を遡るものではないと考える根拠になるかも知れない。

因みに、14世紀に遡るが、応安4年（1371）、今川了俊が九州探題となって太宰府に赴任するまでを描いた紀行文『道行きぶり』（1378）がある。応安4年（1371）11月29日、赤馬の関に到着し、亀山八幡宮の東に阿弥陀堂があり「安徳天皇の御尊影おはします」と記され、知盛の卿女の少将の尼、清盛公などの人名に触れつつ源平合戦に因む寺の由来を述べ、「御菩提を弔ひ奉り侍りき」などと記しているが[今川 1994: 422-423]、平家蟹の記載はない。

梶原正昭氏は『道ゆきぶり』以降、元和9年（1623）の石川忠総『豊後往来紀行』までの中世の記録18件における赤間関の様子を紹介しているが、やはり平家蟹の記載はないようである。

『塵塚物語』と『後太平記』の先後関係は措くとして、『毛吹草』（1645）と両書に続いて、筆者が「平家蟹」の記載を確認するのは、『應氏六帖』（1706）においてである。なお、「しまむらがに」と「たけぶながに」については、先述のように、すでに『本草名物附録』（貝原益軒 1672?あるいは1680年頃）に記載がある。したがって、それぞれ、1185年、

1331年、1531年の戦闘に因む「平家蟹」「武文蟹」「島村蟹」の文字記録への初登場は、少なくとも現在確認できる限り、1645年から1680年頃の範囲に収まることになる。もしかすると、口頭伝承としては、「武文蟹」や「島村蟹」が「平家蟹」に先行していたという可能性もあろう。

前稿からの時間軸を一部遡ることになるが、以下、記録の年代順を基本として資料の紹介を続けていきたい。

『應氏六帖』(1706)

『應氏六帖』は漢学者の伊藤東涯(長胤)が「内容分類した語彙を収録し、振仮名を加え、字義を解したもので、中に俗語を含む」ものである[長澤 1973: ii]。その第四帖は多数の水族の名称を示している。金^{イトヨリダイ}絲魚、竹^{アヂ}鰓魚、紫^{セイゴ}鰓魚の如くであるが、続いて記載されるのは「ヘイケガニ」と振られた「鬼面蟹」であり、「祝允明野記」と付記している[伊藤東涯 1973: 460]。祝允明(しゅくいんめい: 1460-1527)は中国明代の書家にして文人、『野記』は1511年成立のその著作で、後の『本草綱目啓蒙』(1803)『物品識名』(1809)なども『野記』を典拠としているが、中国の「鬼面蟹」を平家蟹と決めつけてよいのだろうか。

『画典通考』(1727)

梶原正昭氏が赤間関への紀行文の中で「平家蟹」の記載を初めて確認しているのは、享保12年(1727)刊行の『画典通考』である[梶原 1998: 205]。『画典通考』は、故事に絵を添えたもので、大岡普齋著、橘守国画として享保12年(1727)に刊行されている[同: 204]。筆者は未見であるが、梶原氏は、早稲田大学図書館所蔵本を紹介されている。その内容は、赤間関は大きな湊で賑わっているが、「潮の漲る事外より^{おびただしく}夥急なり。然るに奇異の神秘ども多く語りあへる」。門司側の和布刈神事に言及し、阿弥陀寺等の記述をさき「土産の品多き中に^{そうめん}索麵あらめ。平家蟹^{いづ}何国にもある物ながら事にふれてめづらしく覚ゆる」とある。平家蟹は余所にもあるという理解は、このカニの分布あるいは流通についての正しい理解の表れといえよう。なお、平家蟹に続いて「世情にもてなす硯膚細やかにして、用ゆるにその徳少なからず」と記されるが[梶原 1998: 205]、平家蟹と赤間硯を当地の二大特産品とするかのような表現はその後の紀行文にも繰り返されることになる。

『頼朝一代記』(1744)

筆者未見だが、『頼朝一代記』は、『草双子事典』によれば、画工・作者未詳、延享元年(1744)刊行の草双子。12巻12冊からなり、十一巻に「西国の平家蟹」が描かれている[叢の会編 2006: 308-310]。

『花がたみ』(1751年の記録)

俳人にして国学者、画家でもあった建部綾足(1719-1774)の紀行文『浦づたひ』には、寛延3年(1750)の長崎遊学の往路、水無月「十七日のあかつき赤間につく。阿弥

陀寺にもふず」とあり、安徳帝の木像や襖絵の様子を感慨深く記述しているが、平家蟹への言及はない。その後、赤間関から「柳が浦をわたりて小倉にやどる」と記している〔建部 1992：408〕。ここでいう「柳が浦」とは具体的には対岸の現在の北九州市門司区柳町・大里やなぎまち だいら一帯に比定されよう〔平凡社地方資料センター編 2004：1261〕。

綾足が平家蟹と思われる現象に言及しているのは、長崎からの帰路の記録『花がたみ』においてである。これについて、梶原氏は寛延3年（1750）の記録とされるが〔梶原 1998：228〕、『花がたみ』の記載年は田中善信氏の注では寛延4年（1751）と年が改まっており〔建部 1992：410〕、それは綾足の年譜とも一致する〔建部綾足著作刊行会 1990：448〕。1751年2月23日、綾足は「柳が浦を弔ふ文」をしたためる。深夜に小倉から柳が浦に向かう船上で、舟の長（船長）は、綾足に対し、壇の浦の合戦について語り「雨夜の火影いさりにあらず」とそれに因む怪火について語っている。綾足は合戦の最後を振り返るが「高直・直次いさんで沈む。知盛碇をささへて沈めば」と具体的である。二位の尼、安徳帝の入水にも触れて後、追悼文をこう結ぶ。「魂魄むすんで天深く、鬼神集って雲早し。白鷺時をたがへず翼を落し、怒れるかんばせ蟹と成んぬ。「かんばせ」とは「顔つぎ」のことであり、田中善信氏の注には「怒りの形相がそのまま蟹となった。平家蟹の伝説を踏む」と説明されている〔建部 1992：414〕。翌24日の記載は「船をあがれば長門の国にして」で始まっている。長門のどこであるのか上陸地は不明であるが、その後「磯づたひの道を二里ばかりゆきて日暮れぬ」とあるので、阿弥陀寺を参拝した様子は窺えない〔同：414〕。それは僅か8か月前に同寺に立ち寄っているからであろうか。

『折々草』（1771年執筆）

綾足は、後の随筆集『折々草おりおりぐさ』において平家蟹について詳述している。「建部綾足略年譜」によれば、『折々草』は明和8年（1771）の7、8月に執筆されている〔建部綾足著作刊行会 1990：460〕。『花がたみ』に記載された寛延3、4年（1750、1751）の長崎紀行の後、綾足は大阪、江戸で生活するが、宝暦4年（1754）初秋から6年（1756）2月にかけて再度長崎に滞在している。その往復に再度もしくは再々度、下関および小倉あるいは門司に立ち寄ったものと考えられるが、それ以降の長門・豊前への訪問は認められない〔同：448-462〕。したがって『折々草』の記録は1750年から1756年までの見聞に基づくということになる。

『折々草』「春の部」の「赤間の関の阿弥陀寺并平家蟹をいふ条」には、赤間関滞在中に阿弥陀寺で平家蟹の標本が売られていたことが記されている。

長門の国赤間の関の上の山に、阿弥陀寺といふ寺の侍り。ここには治承の先の天皇の御像一柱を中の辺に据ゑ奉り（中略）此所にて平家蟹といふものを売るなり。其中にいと赤き物は必ずまなじり疵さかのぼり、怒れる面ざししたり。又白きものは面ざしも又甚なだやかなり。おのれ此赤間関に、汐のかなふを待ちて五日六日侍りて、所につけたる古物語共聞きしなべに、此蟹の事

聞きしが、淡路の海にも侍り。そこにては武文蟹といふよしなり。其外にも西の海にはちちごち侍りとぞ。さて其蟹の面の様を見分きて、白くもし赤くもす。赤きものは酒もて煮たるなりといふ。また面の怒れると和ぎたるとは、此蟹の雌雄なりと言ひし。さるは白き方をば公達蟹と名付けて、旅人には売るなりと語りき。 [日本随筆大成編集部編 1974：14-15]

ここでは平家蟹＝武文蟹とされているが、注意すべきは著者が文献上の知識を書き加えたのではなく、滞在中の聞き取りによって「平家蟹が淡路の海にもおり、そこでは武文蟹という」「西の海にはあちらこちらにいる」という情報を得た(少なくともそういう体裁で記されている)ということである。さらに注目すべきことが3点ある。第一は、標本の赤白の別とその製作法である。第二に、白い方には「公達蟹」という名称もあること、第三に、雌雄による面の表情の相違に関する知識の記載である。

なお、鈴木彰氏は「赤白の差は、現地の人々が甲面の表情を見分け、煮る方法を変えることで作り出した結果であり、表情の差は雌雄の差にすぎないのだという、いわば商売の舞台裏を聞き出していることもたいへん興味深い」と指摘し、「白いほうを旅人に売るといふ言葉にしたがえば、赤いものはあくまでも消費者の目を引き、販売促進をはかるための宣伝広告がわりの品ということになろうか」という解釈を示されている [鈴木 2008：482-483]。なるほど穿った見方である。貴重な酒で煮ては原価を大きく上昇させてしまう。鈴木氏は、赤い方は面のいかついメスを酒で煮たもの。白い方は面がなだやかなオス。と理解されているようである。確かに『折々草』の文面はそうも読みとれよう。しかし、筆者は別の解釈が成り立つと考えている。

「いと赤き物は必ず^{まなじり}疵さかのぼり、怒れる面ざししたり。又白きものは面ざしも又甚なだやかなり」という表現は、赤：怒／白：和の対照を鮮烈に示している。こうした著しい対照は同種の蟹の雌雄差の枠内に収まるものだろうか。また、赤すなわち雌が宣伝広告用で、白すなわち雄のみを販売ということならば、この蟹の雌雄の個体数(少なくとも捕獲個体数)が著しく異なるという条件が前提となろう。筆者が推測するのは、赤と白は別種の蟹だということである。具体的には、前者がキメンガニであり、後者はヘイケガニだという可能性である。前者は、後述するハーンが『骨董』(1902)において記載する「大将蟹」や「龍頭」に相当し、後者は「ただ『平家蟹』という名で通っている」蟹のことではなからうか。『骨董』の挿絵は、それぞれキメンガニとヘイケガニであると考えられる [ヘルン 2007：104-105]。

綾足の解釈において重要なのは「また面の怒れると和ぎたるとは、此蟹の雌雄なりと言ひし」という一文である。全体を通じ、「怒」／「和」の対照は、「また」という接続詞に隔てられ二度語られている。前半では「赤」／「白」の文脈、後半では「雌」／「雄」という別の文脈において語られていると理解するのが自然であろう。鈴木氏の解釈は、「怒」：「赤」：「雌」／「和」：「白」：「雄」と文脈を横断している。いや、もしかすると綾足自身も、「怒」：「赤」：「雌」／「和」：「白」：「雄」と理解していたのかも知れない。

さらに、これが当時の赤間関の人々の理解であったという可能性も皆無とはいえないだろう。彼らが、キメンガニとヘイケガニを「平家蟹」という同種の雌雄と考えていたという想像である。しかし、キメンガニとヘイケガニそれぞれの雌雄差は腹節（いわゆるふんどし）の大きさ等で歴然としており、かつ時期によって両種ともに雌の抱卵が確認されたであろうから当時の関係者がこの点で誤解していたとは考えにくい。そうなると、彼らが、実際の雌雄差に気付いていながら、それとは無関係に、旅行者に対しては、キメンガニを「雌」、ヘイケガニを「雄」だと説明していたという可能性も浮上してくる。

しかしながら、綾足への語り手がそのように語ったとは限らない。綾足は文脈の相違を聞き落としたのかも知れないし、複数の語り手による本来は文脈の異なる情報を一文脈上に繋ぎあわせてしまったという可能性もあろう。それは、聞き取り作業に慣熟しているはずの民俗学徒たちもしばしば侵しがちな誤りなのである。

さて、筆者にはさらに疑問が残る。それはまた「赤」：「怒」／「白」：「和」の著しい対照についてである。先に「白」をヘイケガニに同定・比定しようとしたが、「白きものは面ざしも又甚なだやかなり」との表現が気になってくる。ヘイケガニの甲の様子は、キメンガニに比べれば、比較的「なだやか」とはいえようが、「はなはだなだやか」と呼べるほどのご面相であろうか？そして「公達蟹と名付け」たというのが、「公達蟹」が連想させるのはむしろ美形であろう。少々大胆な仮説となろうが、旅人に売られていた「白い公達蟹」なるものはヘイケガニ科とは別種の蟹、したがって見方によっては「まがいもの」だったという可能性も否定はできない。おそらくそれは、捕獲がより容易な小蟹で、かつ甲羅になだやかな人面を読み取れそうな蟹であろう。もしそうならば、鈴木氏が指摘する、赤く大いに怒った蟹の宣伝効果はより大きくなり、同時に、買い手は、異形への抵抗を軽減しつつ、かつ土産話としての付加価値を持ち帰ることができたであろう。

キメンガニ・ヘイケガニ

ここで、記録の紹介を中断し、ヘイケガニ科のヘイケガニ・キメンガニ・サメハダヘイケガニの分布等について整理しておきたい。

日本甲殻類学会の創立者である酒井恒氏（1903-1986）によれば、ヘイケガニは「日本、韓国、中国、台湾に分布し、日本では有明海と瀬戸内海に多く、その分布の北限は浜名湖であろう」。キメンガニは「疣やこぶの多いみにくい顔つきで日本をはじめとして西部太平洋、インド洋にまで分布している」。サメハダヘイケガニは「顔面が粒々でおおわれ、さめ肌をしており西部太平洋、インド洋にまで分布し、日本では北海道の沿岸にまで北上している」[酒井 1980：41-42]。ほかに日本からインドにわたるマルミヘイケガニ・インドヘイケガニ、相模湾産のマルミヘイケモドキ、伊豆半島および相模湾に分布するイズヘイケガニ・カクヘイケガニ・ヒメヘイケガニが挙げられるが、特に怒った表情に見えるのは、キメンガニ・ヘイケガニ・サメハダヘイケガニの3種であろう。

建部綾足やハーンの記載との関係で特に気になるのは、下関付近でのこれら3種の分布と呼称についてである。下関市立しものせき水族館魚類展示課長の土井啓行学芸員の私信によれば、現在の下関付近での3種の漁獲と呼称は次の通りである。

響灘側(下関市吉見、吉母沖)では、キメンガニがとれ、ヘイケガニはとれず、サメハダヘイケガニはごく稀にしかとれない。反対に、周防灘側(満珠干珠周辺、植生、荊田沖など)ではヘイケガニがとれ、キメンガニはとれず、サメハダヘイケガニについては不明(情報不足)。いずれも、アカエビ類、ワタリガニ類、イカ類、底性魚類を主な漁獲対象とした底びき網(響灘側の底びき網は水深20m~30m付近、周防灘側では水深数m~20m付近)で混獲されるもので、ヘイケガニを主目的とする漁は現在では行われていないが、現在でも時期により、1回の網に数十尾まとまるととれることもある。なお、関門海峡の水路部(部崎から彦島)あたりでは底びき網は行われていない。ただし、漁獲されないからといって生息していないとは解釈できず、響灘側にヘイケガニはいないとは断言できない。

また、これらのカニの呼称も異なり、周防灘の漁師は「へいけがに」といえば現在の標準和名でのヘイケガニを指すが、平成期においても響灘の漁師はキメンガニを「へいけがに」と呼んでいる。

『折々草』における「平家蟹」がキメンガニを含んでいたであろうことは現在の呼称法からもまず間違いないものと考えられよう。

平家蟹の色

ここで、土産物としての平家蟹の色について考えておきたい。酒井恒氏は「屋島や壇の浦辺のみやげものに売っているへいけがにの標本も赤い色に染められているが、実際のへいけがにの色は暗紫色でゆでも赤くはならない」と記している。さらに「甲殻類が熱によって赤くなるのは外骨格に甲殻類特有なクルスタセオルビンという色素($C_{40}H_{52}O_4$)をもっていてそれが熱によってチアノクルスタリンに変わるための現象であるが、かにの類ではこの色素の発達していないもののほうがはるかに多い」という[酒井 1980:193]。

クルスタセオルビンは青い系統の色素であり、ワタリガニの仲間を茹でると赤くなるのはこの理由からである。一方、「ゆでも赤くはならない」はずのヘイケガニであるが、「クルスタセオルビンはアルコールやホルマリンにいれてもいくぶんかは赤変する場合がある」[同:193-194]というのも気になることである。ここで再注目したいのが「赤きものは酒もて煮たるなり」という『折々草』の記載である。アルコールを加えることにより、実際にヘイケガニは赤変するのだろうか。この点について愛知学院大学教養部化学研究室の宮内憲一氏と山名賢治氏にお尋ねしたところ、ゆでる際の変色の要因は熱であると考えられ、酒で煮たとしても反応に大きな影響を及ぼすとは考えにくい。ただし、他の物質がアルコールに反応して赤変する可能性を完全に否定することはできないとのご教示をいただいた。上述のように『折々草』の赤い平家蟹はキメンガニである可能性も高いが、キメンガニとヘイケガニを酒で煮る実験を行う必要もあろう。

いずれにせよ、「酒もて煮たる」とは、飲酒によって人間の皮膚が赤くなることに掛けているものとも考えられる。ガマの油売りの口上と同様、販売促進のための偽りの宣伝文句であったと理解する方がよさそうである。実際には何らかの方法で染色あるいは彩色されていたのであろう。

それでは、何故土産物の平家蟹は「赤い色に染められて」いたのだろうか？ 因みに、現在の赤間神宮で標本に代わって授与されている「平家かに鈴」と呼ばれる土鈴も赤く塗られているし、下関市内の土産物店で販売される「平家蟹」のレプリカも赤く彩色され、赤いフェルトが敷かれた小箱の中に鎮座している。それは、平家の赤旗に因むものと考えた方がよさそうである。

マダイと河童

平家の赤旗と結び付けられる生物はヘイケガニだけではない。マダイをヘイケ、その幼魚をコベケとする地方名が存在する。宮武省三によれば「関門から筑前若松方面にかけて鯛に似て小さく全鱗が金色で上に白い斑点のあるのをコベケと称しているが、コベケは小平家でこれは平家の亡魂が男は平家蟹に女はこのコベケに化したものと伝えられている」という〔宮武 1952：159〕。「鯛に似て」とあるが、しものせき水族館の土井啓行氏のご教示によれば、コベケとはマダイの幼魚のことだという。このコベケについて内田恵太郎氏は『さかな異名抄』において次のように記している。

九州関門の辺では秋の末にコベケ釣りの漁船がにぎわう。コベケはコベイケ（小平家）で、壇ノ浦で平家滅亡のとき、平家の男は無念の形相のヘイケガニになったが、海に投じた女たちは美しい小ダイに化したという伝説による哀切な名である。カップに化した女性もあつたらしく、これは海御前と呼ばれている。近接の豊前海や佐賀唐津にはマダイをヘイケという異名がある。赤いタイと平家の赤旗との連想でもあるが、詩想をそそる。 [内田 1987：58]

「赤いタイと平家の赤旗との連想」が指摘されている。コベケに関しては、ヘイケガニと同様に人間からの化生が語られており、男：ヘイケガニ／女：コベケという対応と対立が認められる。ただし、ヘイケガニが食用にされないのに対し、コベケの方は漁船が賑わうほどだという。

なお、北九州側の伝承では、平家の女性たちは河童に化したとされている。『河童伝承大事典』によれば、壇ノ浦に入水した能登守教経の奥方の遺体が太積（門司区）の海岸に漂着し、村人の手によって葬られた。彼女は「海御前（あまごぜん）」と呼ばれ、九州の河童の総元締になったとされる。壇ノ浦の戦いの後、男は平家蟹に、女は河童になったともいわれているという〔和田寛 2005：514〕。なお、関門ガイドステーション顧問内山昌子氏によれば、海御前の墓には、平家の赤色に因み、冬はナンテン、夏はトマトやホオズキなど赤い物を供える。また、河童は、平家の女官が化したものなので、源氏の色、白いものを引っ張る。そのためか太積付近ではかつて水泳の際には必ず赤い物を身に着けたそうである（2011年6月14日筆者聞き取り）。ここでは、男：ヘイケガ

ニ／女：河童という関係が認められ、また平家：赤／源氏：白という対立が現在も意識されていることが確認できよう。

平家蟹に赤色が期待されるのも当然であろう。後述する『狂歌百物語』(1853)は、平家蟹を詠んだ狂歌45首を収めているが、内5首は、この蟹の色彩を「紅」「赤」と表現している。『折々草』(1771年執筆)の記載は実に興味深く、それらに関する議論が長くなってしまったが、ここで、再び編年体という一応の形式に立ち戻りたい。

『長崎行役日記』(1767年の記録)

長久保赤水(1717-1801)は、源氏の血統を引く系図をもつ水戸藩郷士であり漢学者であった[長久保 1994: i]。明和2年(1765)11月、常陸の廻船がベトナムに漂流し、乗員たちは明和4年(1767)7月に清国によって長崎に護送された。彼等を迎える目的で赤水らは長崎へ向け、同年9月1日に水戸を発った。往復112日間の旅の記録が『長崎行役日記』(文化2年:1805)である。往路では、9月26日に一の谷の汀で船を降り、須磨寺や敦盛の墓を訪ね、また9月27日、船上より八島山を望み、それぞれ源平の合戦に思いを馳せて漢詩を詠んでいる。その後、周防灘を進み、10月6日には、壇ノ浦の対岸である豊前田浦(現在の北九州市門司区)に到達する。「左は豊前、右は長門相距ること僅に五六町(一町は約109メートル)と海峡の狭さを指摘している。この日の日記には、早戸茂明神(和布刈神社)とその神事、「下の關」「岩龍島(巖流島)」「内裏」などの地名や故事について触れているが、「平家蟹」の記載はない[同:15-16]。彼らが平家蟹と出逢うのは翌10月7日であった。舟から上がり、小倉船頭町(現在の北九州市小倉北区船頭町)に宿泊する。夜になると、商人たちが土産の毛織帯、袴地等を持ってきたが、「平家蟹の枯れたるを賣る人有。予五絶を作る」と記している[同:16]^{注2)}。書き下し文を引用してみよう。

夢中帝所在り 二十四年の榮

豈に思はんや介虫の小に 猶平氏の名を遺さんとは [同:67]

「平家蟹に題す」という五言絶句で「夢中で帝所に在って、二十四年榮華を味わっただけのこの小さな蟹の虫に、平家の名がつけられようとは思ひもよらなかった」という意味[同]であるが、標本を実見したうえでの作品ということになる。小倉は、一行が長崎へ向かう陸路の起点であり終点でもあった。帰路は、10月26日に小倉を漕ぎ出し下関に着く。翌日、阿弥陀寺を参拝し、安德帝像、屏風絵、壇ノ浦入水の人々の石塔等を拝すが、ここで感にたへず、「安德帝の廟に謁す」と題する律詩を詠む。そこには「幽燐野徑に飛び靈鬼沙場に哭す(恨みをのんで死んだ靈魂は、荒野の小路に火の玉となってもえ、沙場でむせび泣いていることだろう)とある[同:91]。「沙場」というのは、蟹からの連想であろうか。もちろん、実際のヘイケガニは砂浜を這う蟹ではない。

下関では東風が吹き続け8日間逗留することになる。赤水は町の様子を詳しく記しな

ながらもこの間の平家蟹の記載はない。下関周辺でも平家蟹の販売はあったと想像されるが、重ねての記載は必要ないと判断したのだろうか。

なお、鈴木彰氏は、「この蟹が小倉でも『平家蟹』と呼ばれている以上、その名称に付随した説話がすでにこの地にも伝播し、相応に定着していたはずである」[鈴木 2008：478]と述べている。小倉と下関とは海上三里[春木 1991：77、桃 1972：635]の距離である。この航路は当時の大動脈ともいえ、さらに先述の『九州道の記』の細川幽斎の移動にみるように、これに、海上一里の下関／門司航路と小倉までの陸路との組み合わせを加えれば、この大動脈はさらに補強される。また、後述する古河古松軒の『西遊雑記』(1783)が「平家蟹を名産とする」と記す「田の浦」も小倉領内にあった。下関(赤間関)、田野浦、門司、小倉は一つの小さな文化圏を形成していたと見るべきであろう。

『菩提樹之辨』(1778)

洋学者にして戯作者であった風来山人こと平賀源内(1728-1779)の滑稽本『菩提樹之辨』(安永7年：1778刊)には、「何ぞ変った事があれば、名高い人の名を立てて」という説明のもと、「牛若の切り石」「弁慶の投げ岩」や鎌倉権五郎景正に因む「片目の杜父魚かじか」に続いて「武文蟹」を挙げている。「石の芋」「石蛤」が弘法大師と結び付けられるように、いわれもないのに「名高い人の名」が冠せられる現象を指摘している。伝説の成立原理の一つを説いており、源内の民俗学者としての一面を見るかのようである。

『西遊雑記』(1783年の記録)

古河古松軒(古川古松軒)(1726-1807)は備中の薬種商にして蘭方医[鈴木棠三 1969：329]、全国各地を旅行したことから地理学者と呼ばれることもある[松崎 1991：359]。『西遊雑記』は、天明3年(1783)3月下旬に郷里を発ち、下関を経て九州に渡り、9月に下関に帰着するまでの紀行文である。赤間ケ關については「下關とも云。詩は赤馬關と書、西國第一の湊にして、浪華より中國及び九州四国船路往来の咽くびにて。諸国の廻船寄らざるはなし」とその賑わいが記されている。「壇の浦は安徳天皇入水し給ひし海上にて、阿弥陀寺という寺院に陵有りて御廟には帝の木造を安置し、左右の障子には二位の尼内侍及び平家一族の像を畫く」等々、阿弥陀寺と赤馬關の様子が詳述される[古河 1969：335]。続いて、伊崎、岩龍島、文司(門司)が関、小倉、宮本(武蔵)の墓、早友明神(和布刈神社)など、海峡兩岸の地名と名所が並ぶなかで、古松軒は「田の浦は漁家ばかりの浦にて平家蟹を名産とす。他国にあるとちがひて怒れる顔憤り見へて、いかにも平家蟹といふべきなり」と記している[同：336]。

「田の浦」は現在の北九州市門司区田野浦と考えられる。ここでは平家蟹は九州側の名産となっているのである。『平家物語』の「壇浦合戦」の条には「元暦二年三月廿四日の卯の刻に、豊前国田浦たのうら、門司の関、長門国赤間が関、壇浦にて源平の矢合とぞ定めける」とある[富倉 1967：489]。「田の浦」の地名は戦場名の筆頭にあり、また、こ

こには多数の戦死者の遺体が漂着したのと考えられる。平家蟹を語るにふさわしい場所といえよう。古松軒がいつ海峡を渡ったのかは記されていないが、関門海峡は実に狭小であり、続いて記載される「文司が関の所は往古は長門の地なりしに、神宮皇后の御時に大ひに地震して、大浪来りて今のごとくに地さけて海となりしといふ」という伝説[古河 同：336]はまさに海峡の狭さを説明しようとするものといえよう。なお、「他国にあるとちがひて」「いかにも平家蟹といふべきなり」という表現が非常に気になってくる。他国に類似品が存在したというのだろうか。筆者は先に『折々草』の記載する1770年頃の赤間関の「白い公達蟹」がヘイケガニ科とは別種の蟹だったという可能性を指摘したが、古松軒の記憶と比較が正確であれば、その可能性はより増してくるものといえよう。

『江漢西遊日記』(1789年の記録)

蘭学者にして絵師であった司馬江漢(1747-1818)は、天明9年(1789)1月19日に赤間が関の阿弥陀寺を訪ね、開帳に立ち会っている。「平家蟹は世に数ある蟹と違ひ、背の甲怒れる顔色あり」と記しているが、陵、安徳帝と平家一族の像、絵画、障子、墳墓、書物等、著者が目にしたものの列挙に続く一文であるので[司馬 1986：179-180]、文脈上、平家蟹を実見したものと考えられる。

『西国紀行』(1795年の記録)

小林一茶は寛政7年(1795)の『西国紀行』において「名月や与一が的もかかる夜は」など八島(屋島)を詠んだ一連の句の中で「平家蟹昔はここで月見船」「蟹と成て八島を守〔る〕野分哉」の句を収め、「此あたりは、そのかみ元暦元年三月十八日、一門皆番(最)期の迹也、兜着ていかめしき蟹あり、平家蟹と云。幽霊と化してとがなき人をを(お)びやかすも、おほくは兵ものにを(お)なじければ、身は虫類に属しても、平の姓つを名乗〔る〕、是勇ならずや、忠ならずや」と記している[小林 1978：46-47]。鈴木彰氏は「元暦元年」とあるのを「事實は二年」と記し一茶の誤りを指摘している[鈴木 2008：476]。屋島の戦いのイメージの普及には謡曲『八島』の影響が少なくないものと考えられる。寛正5年(1464)から上演記録がある『八島』であるが[佐成 1956(1931)：3143]、作者世阿弥は、シテすなわち源義経に「その頃は元暦元年三月十八日の事なりしに」と語らせている。この日付けについて佐成謙太郎は「実は元暦二年二月十九日である。作者の思い誤り」と注記している[同：3151]。一茶はこの作品から日付けの誤りをも踏襲したのであろうか。

なお、鈴木氏は「寛政7年(1795)俳人一茶が旅の途中で屋島を訪れた」と記しておいでだが、和田茂樹氏が整理する一茶のこの年の足跡は、讃岐観音寺を起点として伊予に向かい、帰路は丸亀から備前下津井へ渡っているの、一茶は、少なくともこの年には屋島を訪ねてはいないことになろう[和田茂樹 1967：66-67]。

ここで、一茶と下関との関係を考えてみたい。鈴木氏によれば「一茶にはこののちに

も、『享和句帖』所収の「祈父」と題して屋島の平家蟹を詠んだ一連の句」があるが、「それらのなかにも明確に長門・壇ノ浦の平家蟹を取りあげたものがないことは確認しておきたい」と付記している [鈴木2008: 476, 502]。

また、梶原正昭氏によれば、一茶は寛政4年(1792)、九州への巡遊の途中に赤間が関に立ち寄っており、筑紫にて、足跡の及んだ国々の俳友たちの句を集めて『旅拾遺』を編んでいる [梶原 1998: 277-278]。そこには赤間が関の複数の俳人の名とその句が収められているものの、平家蟹を詠んだ句は認められない。梶原氏もまた『西国紀行』を紹介しているが、「これらはすべて四国の屋島での詠になっているが、平家蟹に関する句が多く、平家の怨念の化身とされるこの蟹についての、一茶の思い入れの深さをうかがうことができる」と指摘している [同: 280]。

『化物和本草』(1798)

続いては、全く毛色の変わった資料である。寛政10年(1798)刊行の山東京伝作・可候(葛飾北斎)画の黄表紙『化物和本草』^{ぼけものやまとほんぞう}は、大和本草のパロディという体裁をとり、およそ20件の妖怪や怪異生物を収めている。その一つが「平気蟹(へいきがに)」である。太平記と平家物語に掛け、「大の平紀物語に曰」と始まっている。

へいきがにというハそのむかし寿永のみだれに平家のいちもん西海のなみにしづみ男子の一ねんハへいけがにとり 女子の一ねんハへいきがにとなる。かうらはおんなの顔のごとくはさみハひらもと(平元結)に似てあしハべっこうのかんざしの如しめハワげゆわひ(鬘結わい)に似たりやまの崩れたるやうなことありてもへいきなるゆへかくハなづくるなり

[山東 1798: 189]

壇ノ浦の合戦で平家の一門は波に沈んだが、男子の一念は「平家蟹」となり女子の一念は一文字違いの「平気蟹」になったというのである。非常に滑稽な創作であるが、その背景として当時の市民たちの間での「平家蟹」の知名度が相当なものであったことが確認できよう。

『続未曾有記』(1805)

文化元年(1804)に長崎に来航したロシアのレザノフ大使との折衝に当たるべく、翌文化2年(1805)、幕府から長崎に派遣された幕臣遠山景晋による紀行文が『続未曾有記』である。重い任務を帯びながらも、道中の観察と記述は実に詳細である。景晋は往復ともに赤間関に滞在している。往路は、2月21日7時に中の関(現在の防府市)を出航し、同日、関門海峡に入り、赤間が関(下の関)に午後8時過ぎ停泊する。海峡兩岸の地名を多数挙げ、「赤馬と小倉とは、東西相対し、共に九州の咽喉なり」と記している。なお「小倉の海浜に内裏といふ所は、安徳帝しばし皇居の処と云。今は「大里」と転字せり」とあるが [遠山 1991:207]、「大里」は現在の門司区の地名であり、安徳天皇の行宮(内裏)があったために生じた地名と伝えられる [角川日本地名大辞典編集委員会 1988: 784]。現在の小倉地区とは離れているが、かつての小倉藩領であった。「小倉の海浜に

内裏」とはその意味であろう。

翌22日は雨も強く浪も荒く、九州渡航を断念し、翌々23日、なお西風が強いため「大里に上陸し給はば安全ならん」と大里に渡り、「めづらしく肩輿に入り、浜について小倉に至る」とある〔同：208-209〕。

「れさのつと」(レザノフ)との折衝を終えての帰路、4月3日、景晋は、再び大里より赤間に渡り、阿弥陀寺に参詣している。安徳帝の像、二位尼、平族の像、合戦の首尾を描く絵画や什物、長門本あるいは阿弥陀本と呼ばれる「平家物語」、壇の浦入水の人々の石碑などについて記述している〔同：231-232〕。続いて下関の名産品が記される。「赤間硯石、海門に名高し。浅むらより出るといふ。青石は、田の浦の大稽山より出るを、当所にて硯に切磋するなり。又、平家蟹を干して売る、世人の知る処なり」〔同：232〕。「世人の知る処なり」とは当時の平家蟹に関する知識の共有度が大変高かったことを示しているものといえよう。また、「茹でて」ではなく「干して」ということであるが、ヘイケガニのように、小型でしかも身の少ないカニは煮沸を経なくとも容易に乾燥標本が出来上がると考えられる。一方の硯石であるが、「大稽山」とあるのは「大積山」(北九州市門司区大字大積、大積小学校背後の山)のことであろう。『長崎行役日記』では赤水が名物の硯を買うが、「青石は豊前國田の浦大積山より出といふ」と記している〔長久保 1994：31〕。原料が海峡を超えて加工がなされていたことは興味深い、平家蟹もまた、少なくとも製品としては、海路によって広く流通していたのである。

『小春紀行』(1805年の記録)

一年間の長崎奉行所勤務を終えた大田南畝の文化2年(1805)の長崎から江戸帰着までの紀行文が『小春紀行』(文化3年(1806)脱稿)である〔揖斐 1987：649-650〕。南畝は1805年10月17日、小倉から下の関に渡り、宿を取る前に阿弥陀寺を訪ねる。

堂にいらて、安徳天皇の御木像を拝す。左右の障子に廊の方、大納言典侍、帥の典侍、治部卿の局、信基、知盛、教盛、資盛、経盛、教経の像あり。次の間に天皇御誕生より御入水にいたるまで、平家の盛衰、源平の合戦のありさまを絵がき、絵の上に絵とき文あり。側の僧、手に竹とりて、一々に絵ときをのぶる声あはれなり。〔大田 1987：21〕

阿弥陀寺では、古を語る諸装置が並び、絵解きも行われていたのである。亀岡八幡宮を経て市中に至るが、「下の関は赤間に関にして問屋多し。市中もまた賑へり。(略)すべて入船々と書る札多きは、湊ゆへなるべし。嬉野茶・鹿子尾茶あり、かしてんまあり、菓子昆布あり、平家蟹あり、などかける張札も見ゆ」〔同：23〕と市中の様子が記される。平家蟹を扱う問屋があり、そのポスターまでがあったというのである。「かしてんま」が何を指すのかは不明であるが、茶や昆布と並んでいるので、「平家蟹」もまた乾物であったと考えるべきであろう。そして、「入船々と書る札多き」ともあるので、その「平家蟹」もまた移入品であった可能性もあろう。

標本の産地と流通

宮武省三は、1952年の論文において平家蟹の標本について興味深い情報を記述している。氏の生地である讃岐「高松では明治末期まで教育参考品という名前の下に、たしか丸亀町であつたと思う一軒、平家蟹の標本を売っていたのもあり、又屋島壇浦でこれがまだとらえられたから、市井の人もよく見なれて」いたが「今では蟹も姿を見せず」、「津田の海浜」（現在のさぬき市津田の松原）にはまだ（1952年当時）安処しているという〔宮武 1952：158〕。さらに、下関の壇ノ浦でも、

大正の初ごろには最早いなくなって、これよりほど遠からぬ響灘に面する綾羅木^{アイラギ}で見らると知人から耳にしていた。そこでその当手下関にも一軒この蟹の標本を売っている店があったので立寄り、この標本はみな綾羅木産ですかと質ぬと、イヤ綾羅木でも中々とれなくなったので今では讃岐高松から取寄せていると正直に云うので、さては高松を仲継として津田から発送しているナと感付いたような事である。〔同〕^{註3)}

「その当時」というのは、宮武が大阪商船会社門司支店に勤務していた1911年から1929年の間と考えられ、当然宮武は対岸の下関の情報を詳しくははずである〔笠井 2012：505〕。

南畝が1805年に目撃した問屋の張札は、讃岐からではないにしても響灘方面あるいは対岸の田の浦等からの入荷を示していたという可能性は否定できないであろう。少なくとも、1805年当時、すでに平家蟹の標本には問屋が仲介するほどの相当な需要と供給があったことが確認できるのである。

同じ宮武論文によれば、大正7年（1918）1月の雑誌『スコブル』4号に「平家蟹、疝気の妙薬なりと云う、平家蟹を茹で日光に乾かし細末にして服用すなり分析乞う云々」と見えているという。平家蟹の薬用とは博識な宮武自身も初めて耳にしたというが〔宮武 1952：161〕、もしかすると1805年当時の需要には薬用としての消費が含まれていたという可能性もあろう。もしそうならば、現在の骨董市等で標本を目にすることが少ないことの説明にもなる。

『伊沢蘭軒』（1806年の記録）

森鷗外（1862-1922）は、江戸時代の医師にして儒学者であった伊沢蘭軒（1777-1829）親子の長編史伝『伊沢蘭軒』（1916-1917）を描いている。「その46」「その47」には、文化三年（1806）の長崎奉行の赴任に随行した蘭軒による馬関（現在の下関）訪問時の様子が描かれている。6月26日には阿弥陀寺と安德帝陵等を参詣し、同日、「赤馬関」と題して詠んだ詩に「蟹甲は奇鬼を成し、硯材は紫銅の如し」という句がある。「蟹甲」とは福島理子らの注釈には「いわゆる平家蟹のこと。甲羅は人面の如く、平氏の怨霊の化したもの」とある。硯材というのは、赤間石のことである。ここでも、平家蟹とそれが対を成して語られているのである。翌6月27日は風雨が激しく、蘭軒は宿に留まっていたが、「一商人平家蟹を携て余にかはんことをすゝむ。乃ち庾子亮蟹譜に載

する蟹殻人面の如きものありと称するものなり」と記されている〔同：176〕。注釈によれば、蟹譜云々は『蟹譜』の『怪状』の項の『呉の沈氏の子蟹を食らうに背の殻鬼の状の若き者を得、眉目口鼻の分布明白にして常に之を宝翫す』をさすと思われる」という〔同：177〕。なお、『蟹譜』は「南朝宋・傅肱撰。二卷。蟹にまつわる文辞を集め、考証した書」である〔同：502〕。

蘭軒の馬関滞在記ではあるが、もちろん著者は蘭外である。蘭軒自身の記録との照合の作業を行わなくてはならないが、鈴木彰氏によれば、『伊沢蘭軒全集』第7巻(蛸島未見)所収の蘭軒自筆本と「森鷗外著『伊沢蘭軒』の本文とは、表記がわずかに異なるが、内容の相違はない」と記し、鈴木論文においても森鷗外からの引用がなされている〔鈴木2008：484-485, 502〕。

『撰西奇遊談』

『撰西奇遊談』は、一連の名所図会で著名な秋里籬島による文化7年(1810)序、文久3年(1863)刊の紀行文である。その「平家蟹」の条は「当赤間関の海浜に異形の蟹生ず。甲に自然と人の面をあらはし、しかも憤怒の想(ママ)なり。土俗是を平家の亡霊なりといふ。其形島むら蟹にも似たり」と始まっている〔秋里 2002:379〕。「島むら蟹」を以って平家蟹のイメージを説明しようとしている点が注目されるが、京都在住の籬島と彼が想定した読者にとっては、尼が崎・天王寺の島村蟹がより身近だったからであろうか。続いて「諸人且此蟹を食はず。漁の網にかかるとも、かならずはなちやる事なり」と記すが、「且」の文字は見逃すべきではなく、執筆当時、この禁忌はすでに守られていなかったことを伝えているようである。そうした中で一つの事件が語られる。やや長文になるが引用してみよう。

明和の頃〔1765-1771〕、山口何某なる者、霊のさた、かつて〔全く〕信ぜず。件の蟹^{かににたい}対していふ、「抑汝平家一門の霊なるよし。依て我示す、汝一朝の榮にほこり、忝くも一天の君〔後白河法皇〕を鳥羽の離宮へ押こめ奉り、女子をもつて萬乗の位に昇ず。天是をにくみ給ひけるにや、遂源家発て誅伐す。是正に天のなせる所なり。然に汝、其無念をわすれず一念末世にのこし、かかるあさましき形をあらはし、はづかしきをしらざるは愚人なり。以来其形なすことなかれ」と三度^{つえ}策うつて去ぬ。其夜かの山口なるもの、臥床に入て寝ると忽、発熱して惣身炎々ともゆるが如くなる時に、白き糸にて威たる鎧なげかけたる武者、山口が枕に来て曰、「汝下賤としていはれざる高位に對し罵るぞや。剩^{あまつさえせつてう}拙杖をもて我をうつ罪豈かるからず。呵責して思ひしらすべし。いざ来るべし」と髻とつて引立るに「嗚呼」といふて一声喚ぶとおもへば、忽然と夢の覚たる如く、かくすること三夜におよび、終怪夢のため死たりけるとなん。〔同：379-380〕

この後、籬島の冷静な評が添えられる。山口何某には霊を認める心があったため「疑念に疑念がかさなりけるによって、かかる怪夢を見、命を失ひける也」〔同：381〕という解釈である。鈴木彰氏はここに「平家蟹の怪異譚と向き合う二つの姿勢 — 畏怖と懷疑 — が衝突していること」を読み取っている〔鈴木2008：489〕。

『西遊日記』(1813年の記録)

鈴木彰氏は「壇ノ浦で売られていた平家蟹のなかには、どうやら食用のものもあったようだ」と述べている [鈴木2008:485]。そう推測する根拠は、医師であった新宮涼庭(1787-1854)の『西遊日記』の文化10年(1813)9月6日の条である。

涼庭は友人とともに阿弥陀寺を参拝し、安德帝廟、六将と姫たちの像、狩野元信の作品を見て、僧侶の説明を受ける。目の前の海上は荒れ、驟雨に襲われ、寺を下って旅館に戻る。問題は、その後の記載:「還_ニ逆旅_一。多_ニ巨螯_一。味極メテ甘味。甲如_ニ鬼面_一。俗_ニ伝平氏冤魄ノ所_レ化云」である [新宮 1992:324]。鈴木氏は、「逆旅(旅館)に戻り、当地にたくさんいる、大きな鋏のある極めて甘味な蟹の話題に接したようだ。鋏が大きいという形態上の特徴は、今日の分類というへいけがに科に属するものとは異なるように思われ、その点には留意が必要」とコメントしている [鈴木2008:486]。

下関におけるこの食用の「平家蟹」、より正確には、「大きな鋏をもち、甲が鬼面のようで、旅館が旧暦9月に提供していた極めて甘味な蟹」の正体は何であろう? それはガザミ(ワタリガニ)であろうと推測される。下関では現在もガザミ漁が盛んである。涼庭の同日の日記には阿弥陀寺周辺では落葉が徑を塞いでいたという。秋はガザミの雌が特に旨味を増す時期といわれている。江戸後期の歌舞伎作者、西澤一鳳(1802-1852)は下関の「かさみ」に触れている。著書『皇都午睡』に「蛸と蟹に灸をすへる」という一文が収められ、「九州地へ下る者の数日大船に乗て風待汐待の徒然に絶兼(略)下の関にてかさみといへる蟹を求め甲へ灸をすへたれば苦しみ横這に這廻り泡を吹身を^{そばだ}峙て鋏にて泡を切て甲の灸を消せしと聞きし」とある [西澤 1906:522]。動物虐待ともいえる内容だが、幕末期に下関で「かさみ」が流通していたことが確認できる。

ガザミならば確かに美味である。しかも、鋏の大きさは目立ち、甲の模様はやはり人面に見えなくもない。島村蟹の正体がガザミと考えられるのも同様な理由による。ここで興味深い事実がある。本尾 洋 氏の調査によれば、1970年代の石川県安宅ではガザミの地方名が「ヘイケガニ」となっているのである [本尾 1974:11]。下関においてもガザミが「平家蟹」と呼ばれていた可能性が想定できない訳でもない。しかしながら、ヘイケガニ科のヘイケガニやキメンガニを土産物としていた下関で、ワタリガニ科のガザミを同名で呼称していたのだろうか。その可能性は低いものと考えられる。

本尾氏は石川県近海産のカニ類の地方名について詳細な調査を行った結果、「時には同一種に同一地区でいくつもの名前があったり、ほんの数キロしか離れていない漁村同士でさえ全く別の名前を与えていたりすることもしばしばある」と指摘している [本尾 1974:13]。具体的には24種のカニに対する都合59もの地方名が収録されている [同:11-12]。すなわち、1学名(和名)に複数の地方名が存在することが多いということである。一方で、別種のカニが同じ地方名をもつこともある。例えば、加賀の金石地区では、サメハダヘイケガニとキメンガニの地方名はともに「貝カズキ」であり、「生時よ

く貝殻類を背負っているところから」の命名である。また能登半島西岸の福浦・赤崎の両地では、クロベンケイガニとカクベンケイガニの両方の地方名がヘビガンとなっている〔同：11-12〕。「漁民達は近似種については類別していないことが多」いのである〔同：13〕。一方で、科を異にするベニイシガニとエンコウガニが同じく「ハゼガン」という地方名をもつが、前者は能登半島西岸の高浜、後者は東岸の宝立・穴水と距離を隔てている〔同：12〕。すなわち、石川県近海の資料からうかがえることとして、こうした異物同名現象は、同一地においては対象が近似種である場合のみに成立し、異種については異地でなければ成立しにくいということになる。すなわち、下関という同一地の「へいけがに」がヘイケガニとガザミの総称であるとは考えにくいということになる。

ここで注意したいのは涼庭には土産物としてのヘイケガニの記載がないことである。涼庭はヘイケガニ科のヘイケガニの姿を見ることなく、平氏の冤魄に関わる伝承を側聞し、現地で供されたガザミを平家蟹と混同したという可能性もあろうが、蘭学を学ぶ涼庭がこうした単純な誤解をしたというのも不自然である。あるいは誰かに担がれたのだろうか？

小括

タイムマシンでもない限り、事実は確認できないかも知れない。しかし、ここで類比したくなるのが錦絵における平家蟹の描かれ方である。錦絵が平家蟹を描く舞台は、赤間関や屋島よりも、兵庫の大物浦である場合が多い。それは歌舞伎や浄瑠璃の『義経千本桜』の影響であろう。歌川国芳(1798-1861)の『大物之浦海底之図』(嘉永期)〔鈴木重三 1992：191 & 74図〕には10数尾の蟹が描かれる。その多くはヘイケガニをモデルとし、中でもよく目立つ4個体はヘイケガニの特色をよく捉えている。国芳がヘイケガニの標本か細密画を参照して描いたことは間違いないだろう。同時に気付くのはヘイケガニたちの行列の中に明らかにワタリガニ科のカニをモデルにしたと考えられる蟹が描かれていることである。同じ国芳の『壇浦戦之図』(1847年頃)にも5尾の蟹が描かれる。鈴木重三氏の解説には「中央の岩山に、総身に矢傷を負った死相の知盛が、太綱を身体に巻き、大碇を差し上げ入水寸前の『碇知盛』の見得で立つ。足許に人面の甲羅をもつ平家蟹が這い寄る姿を配して、怨念の凄まじさを見せた」とある〔鈴木重三 1992：131図&200〕。5尾の蟹は、どう見てもヘイケガニではない。甲は四角形に近く、額後方の隆起などからベンケイガニ科の蟹がモデルではないかと推測される。なんという皮肉であろう。この後予想されるのは、ベンケイガニが義経を襲うという展開である。なお、この蟹は陸上の岩を這っているのも、生物学的にはヘイケガニではありえずにベンケイガニであればむしろ自然ということになる。国芳はそんな蟹たちの生態を配慮したのだろうか。やはり国芳の『程義経恋源一代鏡』〔瀧瀬 2008：74〕には義経と弁慶の乗る船を6尾のカニが襲いかかろうとする様子が描かれている。内2尾は明らかに

ワタリガニ科のカニがモデルであると考えられ、他の2尾のモデルはベンケイガニのようで、残りの2尾は想像上の蟹であろうと推測される。その背後には20数名の平家側の幽霊が描かれるが、一人一人の顔の造作が巧みに描き分けられている。蟹の甲羅の表情も同じように描き分けられたのであろうか。

国芳の認識では、「平家蟹」とは、壇の浦や大物浦に棲息する種類を問わない蟹たちというものだったのかも知れない。ここで、一つの民間伝承に目を向けてみたい。川島秀一氏は、宮城県気仙沼市唐桑町の鮪立の浜田徳之翁（明治34年生まれ）からの聞き取りによる興味深い伝承を紹介している。すなわち、『海で亡くなった者はガニッコ（蟹）に成る』と言われ、船上から食べ物の残り物を海へ投じるときや、盆やお彼岸の最終日のオホトケ送りの日に供物を海に納めるときに、『ガニッコに上げ申す』と語ったという〔川島 2012:103〕。この伝承に基づき、川島氏は「瀬戸内海に伝えられる『平家蟹』の伝説なども、もともとは海難者がカニに生まれ変わるといふ伝承が広く伝わっていたことが基になっていると思われる」と指摘されている〔同：108〕。同様な伝承を他に知らないが、かつての日本でカニ一般についてのこのような認識が共有されていたとすれば、涼庭の記述や国芳の作品は不自然ではなくなるともいえよう。

それにしても、涼庭の記述にみる、平氏の冤魄が化したとされる蟹を食用とするという感覚は大いに注目される。同時に、宮城県のガニッコも、食用の蟹を含めての認識であるのか非常に気になるところである。なお、平家蟹を人間が食用するという想像は、後述する『狂歌百物語』所載の狂歌「奢りたる末の報いに平家蟹 とられて今は口に入るらむ」にも認められるものであった〔京極・多田 2008：28〕。

ところで、国芳は、『嶋村弾正高則』（1844年頃）において島村蟹をワタリガニ科のカニとしてのみ描き〔Joly 1967：465〕、弟子の歌川芳員も『嶋村弾正高則 本朝名将鑑』（1858年頃）においてそれを踏襲している。ちなみに水木しげる氏の「かに坊主」も、山梨県の山中のカニであるはずなのにワタリガニ科のカニの姿で描かれている〔水木 1981：66-67〕。北日本をのぞき、古くから食用の海産のカニとして日本人にもっとも馴染み深かったのはワタリガニであった。それは、また画家たちのスケッチの素材としても最適であったと考えられる。食欲の対象でありながら、創作意欲の対象ともなり、巨大に描くことによって立派な恐怖の対象に転じえるものと考えられる。（以下、次稿に続く）

謝辞

本稿執筆に際しては、下関市立しものせき水族館魚類展示課長の土井啓行学芸員、また愛知学院大学教養部の宮内憲一氏（化学）・山名賢治氏（化学）、同文学部の神山重彦氏（日本文学）にご専門の立場からご助言・ご教示をいただいた。深く感謝申し上げます。

注

- 1) なお、『本草名物附録』の成立年について、磯野氏は「寛文12年(1672)初刊『本草綱目』和刻本の附録だが、執筆されたのは延宝8年(1680)頃の可能性がある。しかし、このリストでは一応1672年に置き、?を付した」と注記している[磯野 2012b:304]。
- 2) 鈴木彰氏は、明和2年10月7日と記しているが[鈴木 2008:477]、明和2年は廻船漂流の年であり、赤水らの長崎紀行は明和4年である。
- 3) ここで綾羅木の地名が気になるが、土井啓行氏によれば、古い漁師からの聞き取りでは、綾羅木、安岡、吉見沖などではかつて底びき網漁が盛んであった。この付近では、地先の魚を材料にしたかまぼこ製造が行われ、その漁に際して「へいけがに」(キメンガニ)が混獲されていたと考えられる。ただし、漁船や網の性能は現在よりも低く、浅い海域を操業していた可能性があるという。

引用文献一覧

- 秋里籬島 『撰西奇遊談』 板坂耀子編 2002 『近世紀行文集』 第二巻九州編 葦書房 pp. 355-400
- 磯野直秀 2012a 『日本博物誌総合年表』 平凡社
- 磯野直秀 2012b 『日本博物誌総合年表 [索引・資料編]』 平凡社
- 伊藤東涯 『應氏六帖』 長澤規矩也解題 1973 『唐話辞書類集』 第12集 汲古書院 pp. 307-606
- 揖斐 高 1987 「解説 南畝老年の生活記録」 浜田義一郎他編 『大田南畝全集』 第9巻 岩波書店 pp. 649-681
- 今川了俊 『道行きぶり』 稲田利徳校注・訳 1994 『新編日本古典文学全集48 中世日記紀行集』 pp. 389-426 小学館
- 内田恵太郎 1987 『さかな異名抄』 朝日新聞社
- 大田南畝 『小春紀行』 浜田義一郎他編 1987 『大田南畝全集』 第9巻 岩波書店 pp. 1-102
- 益軒会 1973 「益軒全集巻之六 凡例」 『益軒全集』 国書刊行会 pp. 1-2
- 貝原益軒 『扶桑記勝』 益軒会編 1973b 『益軒全集』 巻之7 国書刊行会 pp. 310-542
- 笠井純一 2012 「宮武省三」 松井竜五・田村義也編 『南方熊楠大事典』 勉誠出版 pp. 505-507
- 梶原正昭 1998 『平家残照』 新典社
- 角川日本地名大辞典編集委員会 1988 『角川日本地名大辞典40 福岡県』 角川書店
- 川島秀一 2012 「体に刻まれた記憶：被災漁村を歩く(下)」 『季刊東北学』 第30号 東北文化研究センター pp. 98-108
- 木下勝俊 『九州の道の記』 稲田利徳校注・訳 1994 『新編日本古典文学全集48 中世日記紀行集』 pp. 571-586 小学館
- 京極夏彦・多田克己 2008 『妖怪画本・狂歌百物語』 国書刊行会
- 叢の会編 2006 『草双子事典』 東京堂出版
- 瀨瀬久里編 2008 『妖怪カタログ』 大屋書房
- 国書研究室編 1993-1995 『国書総目録』 補訂版第二刷 全8巻 岩波書店
- 小林一茶 『西国紀行』 丸山一彦・小林計一郎校注 1978 『一茶全集』 第5巻 信濃毎日新

- 聞社 pp.33-68
- 酒井 恒 1980 『蟹：その生態の神秘』 講談社
- 佐成謙太郎 1956 (1931) 『謡曲大観』第5巻 明治書院
- 山東京伝作・葛飾北斎画 1798 『化物和本草』 早稲田大学図書館古典籍総合データベース
- 司馬江漢 『江漢西遊日記』 鈴木棠三 1969 「西遊雜記 解題」 宮本常一・谷川健一・原口虎雄編 『日本庶民生活史料集成』第2巻 三一書房 pp.263-328
- 新宮涼庭 『西遊日記』 富士川英郎・佐野正巳編 1992 『紀行日本漢詩』第3巻 汲古書院 pp.314-340
- 鈴木 彰 2008 「平家蟹と壇ノ浦 一旅人たちの見聞をめぐる」 説話と説話文学の会編 『説話論集』第17集 清文堂出版 pp.465-505
- 鈴木 彰 2009 「〈日本〉を背負った平家蟹 ーラフカディオ・ハーンの「平家蟹」をめぐる小考ー」 神奈川大学人文学研究所編 『表象としての日本：移動と越境の文化学』 御茶の水書房 pp.5-50
- 鈴木重三 1992 『国芳』 平凡社
- 鈴木棠三 1969 「西遊雜記 解題」 宮本常一・谷川健一・原口虎雄編 『日本庶民生活史料集成』第2巻 三一書房 pp.329-331
- 建部綾足 『紀行 花がたみ』 田中善信校注 1992 『新日本古典文学大系』79 岩波書店 pp.409-420
- 建部綾足 『折々草』 日本随筆大成編集部編 1974 『日本随筆大成』第二期21 pp.3-90
- 建部綾足著作刊行会編 1990 「建部綾足略年譜」 建部綾足著作刊行会編 『建部綾足全集』第9巻 国書刊行会 439-463
- 蛸島 直 2012 「蟹に化した人間たち(1)」 『愛知学院大学人間文化研究所紀要人間文化』27 pp.189-206
- 多田一臣 「蟹」 1995 (1994) 国文学編集部編 『古典文学動物誌』 學燈社 pp.168-169
- 遠山景晋 『続未曾有記』 板坂耀子校訂 1991 『叢書江戸文庫』17 近世紀行集成 国書刊行会 pp.172-269
- 富倉徳次郎 1967 『平家物語全注釈』下巻(一) 角川書店
- 長久保赤水著 長久保片雲編著・関根七郎訳解 1994 『長崎行役日記』 筑波書林 pp.1-156
- 長澤規矩也 1973 「解題」 古典研究会編 『唐話辞書類集』第12集 汲古書院 pp.i-ii
- 西澤一鳳 『皇都午睡』 国書刊行会編 1906 『新群書類従』第1 国書刊行会 pp.479-752
- 八文字自笑・江島其磧 1995 (1720) 八文字屋本研究会編 『八文字屋本全集』第8巻 汲古書院 pp.75-158
- 原口虎雄編 『日本庶民生活史料集成』第2巻 三一書房 pp.329-396
- 春木南湖 『西遊日簿』 中村幸彦・日野竜夫編 1991 『新編稀書複製会叢書』第43巻 臨川書店 pp.67-188
- 平賀源内(風来山人) 2011 『菩提樹之弁』 国立国会図書館デジタル化資料
- 富士川英郎 1992 「解題」 富士川英郎・佐野正巳編 『紀行日本漢詩』第3巻 汲古書院 pp.3-22
- 古河古松軒 『西遊雜記』 1969 宮本常一・谷川健一・
- 平凡社地方資料センター編 2004 『日本歴史地理大系第41巻 福岡県の地名』 平凡社
- ヘルン, ラフカディオ 平井呈一訳 1940 (1902) 「平家蟹」 『骨董』 岩波文庫 pp.103-106
- 細川幽斎 『九州道の記』 伊藤敬 校注・訳 1994 『新編日本古典文学全集48 中世日記紀

蟹に化した人間たち(2)：平家蟹の記録を中心に(蛸 島)

- 行集』小学館 pp. 543-570
- 松崎利雄 1991 「古川古松軒」 国史大辞典編集委員会編 『国史大辞典』第12巻 吉川弘文館 p. 359
- 水木しげる 1981 『水木しげるの妖怪事典』 東京堂出版
- 宮島水族館 1986 「水棲節足動物の地方名調査」 『日本動物園水族館雑誌』28(4) pp. 79-116
- 宮武省三 1952 「平家蟹余譚」 『民間伝承』 16巻4号(通巻167号) 民間伝承の会 pp. 156-163
- 本尾 洋 1974 「石川県近海産エビ, カニ類の地方名」 『石川県増殖試験場研究報告』第3号 pp. 9-19
- 桃節山 『西遊日記』 竹内利美・原口虎雄・宮本常一編 1972 『日本庶民生活史料集成』第20巻 三一書房 pp. 623-701
- 森鷗外 『伊沢蘭軒』 福島理子・村上哲見・藤實久美子・山崎一穎注釈 2000 『鷗外歴史文学集』第六巻 岩波書店
- 早稲田大学出版部編 1928 『後太平記上』 (『物語日本史大系第六巻』) 早稲田大学出版部
- 和田茂樹編著 1967 『小林一茶 寛政七年紀行：複製と解説』 愛媛出版協会
- 和田寛 2005 『河童伝承大事典』 岩田書院

